宮崎大学教育文化学部紀要　人文科学　第23号（2010）37－59頁

『諏訪の本地』の研究（六）

柳原由美・吉田千春・白石一美

御伽草子・中世小説・室町物語などと称せられる幾百の短編の一つ、石川本『諏訪本地』の翻刻をなす。諏訪本地は大きく2系統に、その主人公の名前を以て諏方（よりかた）系と兼家（かねいえ）系に2分類される。神道集の流れをくむ諏方系統のテキストは信州諏訪地方を中心に数多く現存する模様であるが、後者兼家系の現存テキストは『室町時代物語集第二』解題（P437）に昭和十三年現在か「数多い諏訪本地の写本の中にも、この系統に属する写本はつひに見当たらなかつた。」由で同書に一本のみ収録。その伝存は福田　晃『神道集説話の成立』（三弥井書店 1984）によれば全て3種9本のみ。

平成八年の春休み、薩南地方を訪書旅行のおり、鹿児島県吉松町川西の同町教育委員会において平成七年三月同町発行の『吉松郷土誌 改訂版』を購入（1996.3.19）、同誌に石川本の伝来修理の記述があり、室内の壁にも絵巻物の文字部分が拡大コピーして貼られていた。とりあえずその拡大部分に関して質問してみた処、同誌編集委員のおひとりをご紹介くださり、教育研究用にカラー写真も後日入手、これを学生に毛筆書写の本文を読ます国文学演習教材として複製本高倉院厳島御幸記その他とともに使用していた。

平成十七年の夏休み、数日間、研究室を留守にした処、写真アルバム所在不明となった。後、当ゼミが本学部のプロジェクト、宮崎県における地域社会の研究―「みやざき学」の構築をめざして―（研究代表　戸島信一）に参加、上井覚兼日記ほか、諏訪資料の整備もと思い立って翻刻の下調査にとりかかった次第である。

石川本の修理復原表装　前掲吉松町郷土誌P678～681に拠れば、明治45年5月、吉松村川西の石川八十八氏所伝の箱より縁起書を発見。「箱中ニ充満セル紙片ハ既ニ支離滅裂ニ帰シタルモ余程ノ古物ナレバ一応調査シテ保存ノ方法ヲ講スベシト決シ」、「七月ヨリ整理ニ着手シ支離滅裂セル紙片ヲ継キ裏打ヲナシタルニ一ハ長井六拾八尺ノ二巻トナレリ完了セシハ大正弐年三月ナリキ……」、4月19日に宝物の披露とこれを納める函の製造、その後、「昭和十三年八月十三日御神宝縁起書表装改造」して現在に至る模様である。

兼家系本の発見と本文公開　前掲福田書に拠れば、昭和29年の臼田甚五郎氏所蔵本の紹介・望月善吉氏所蔵本・横浜本など、兼家系伝本が戦後少しずつ発見。石川本は同書P96にこう記される。

鹿児島の民俗学者寺師三千夫氏は、昭和三十八年八月、鹿児島県姶良郡吉松町川西の南方神社神主の石川家蔵の天文十二年書写『諏訪御由来之絵縁起』上下二巻を披見され、『南方神社縁起書』と題し、ガリ刷りで本文を紹介された。これによって筆者も石川家を訪ねて当縁起を書写するとともに、昭和四十一年に、これを寺師三千夫氏と共編で『神道物語集㈠』に収録したのである。

現存する最古（1543）の兼家系絵巻がここに活字収録（伝承文学資料集第一輯・三弥井書店発行　石川タモ氏所蔵本）されたわけである。

この本と近隣の宮崎県えびの本・都城本との比較対照作業の進行とともに活字本に示された解読以外にこのような解読も可能ではないかとの思いが生じ、私事ながら論者定年（2012.3）間近の都合もあり学生二名による調査結果をここに翻刻（電子書籍版はパソコンで宮崎大学附属図書館→リポジトリ→白石）する次第である。

研究室のゼミ活動の一つでもあり且つまた柳原由美（平成21年3月本学卒業・宮崎大学学務部教務課勤務）と吉田千春（平成21年3月本学卒業・福岡県春日市在住）の夏の博物館実習の別方面の実習の意義もあり、平成20年の秋より演習絵巻コピー残片ほか準備、平成21年2月に鹿児島県湧水町（旧吉松町・町村合併）教育委員会に参上、事前に研究室でベース入力した本文と町教委ご提供の絵巻写真とを比較解読した。現地まで車で片道一時間半、パソコン2台持参・人員3、日帰りで作業終了の計画であったが、1日で終了せず出直して2日の実施結果となった。

論者は主に査閲チェック役で別に絵巻本文の各局面を考察、字を書き写す態度をみた。一つだけここに記せば絵巻の親本祖本は既にして音声語りの口承本か。例えば「それにしてもそなたはどうして姉さんのむねのうちを知つてゐなさる、さういふのには何かしようこがあつての上でなければならぬが姉さんがさういふことを洩らしたことがあるとでもいふのかと泣いてゐるのを……」（谷崎潤一郎・蘆刈）と長々続く口語り文体の作品があり、諏訪またこれに同じい。一方、絵巻の書き写し手としてはここで文を終止したいと思うくだり、終止形「給ふ」の「ふ」文字が崩れて180「給へば」と「ふ」を天地圧縮した「へ」文字になって連綿する条、苦笑した。

書写態度は「女房」を「め房」と書くなどやや荒く、早のみこみや混同（318・1006）の傾向があるが概ねは祖本に忠実かと思う。そのことは不安をおぼえる箇所に小字傍書する傾向や祖本の字形に従う傾向（775志恵之・870具可ゝ）から推測される。

湧水町に隣接する宮崎県えびの市に大永5年（1525）旧奥書の明暦四1658年書写絵巻があり、こちらは音声語り台本ならぬ黙読本文を作る態度が強い。接続詞ほか文中に種々の語を補って書記言語としての文章表現の完成に実に細かい配慮をみせる。この書写態度は石川本に対照的である。

文字の破損・難読箇所はこれを□で示した。枠中の字は単なる私案であり解ではない。

本文中に読点などや 」（料紙継目）と料紙番号を、10行毎の行頭右に行番号を付した。

ＡＢＣひら仮名三字についてＢがＡの右肩上方よりＣの頭へ流れて「〳〵」とも「ら」とも判別し難い箇所や「うーら」・「りーる」、筆の流れか「候」か、なお判然し難い箇所が残ることを申し添えておく。

翻刻に際して福田　晃氏の著書に負うところが大きい。また、ご所蔵の絵巻本文の翻刻に際してこれをご許可下さいました湧水町川西南方神社宮司石川浩一様ならびに調査に便宜を与えてくださいました湧水町教育委員会（担当主査　大山長祐様）に御礼申し上げます。

吉松本　上巻

十六の大国の中に、はらなひ国といふくに有、□
大皇七人のひめをもたせ給ふ、内大臣ノ左大将□
まします、ちう人にて大王の御おほえかしこくおは□
まして、しゆう夜の奉公めてたかりけり、かかりし
ほとに、かたへのきやうさうこれをそねみて、七人のひめ
をおかしたてまつり給ふよし、大王にさんそふせらる□
によつて、えいりよやすめかたくおほしめして、
その国の大臣をけくわんせられて、彼国を追□
し給ふ、三十七人□□類をひきくして、御ふねに
とりのり給ひてはらなひこくをおし出て給ふ、波風に
まかせてゆられおはするほとに、日数つもりて、日本
国筑前の国はかたの津につき給ふ、かの津に□
老翁□もとにとりあかりて、宿□かり給ふ、内大臣
かの家ぬしに仰られけるは、抑彼国にぬしなきくに
主なき所や有ととひ給□は、家□しこたへて申
様、我朝日本国は六十六ヶ□しま二ツのくになり、
かたしけなく天照太神の御子、あるしと成まし」1
ます、くにゝは国司、城には荘子、こほりには郡司、
郷にはかうしとて定置給ふなりと申、内大臣重て
とうて宣はく、さもあれ、主なきところ、いかてかな
あるへきとのたまへは、うちあんして申ける、
あふみの国かうかの郡三千八百町の所こそ、昔し」2
よりぬしをさためられ候へ共、ふしきそ主さたまらぬ
所とうけたまはれ、かゝるところは有とても、たれか
ちきやうし給ふへきとそ申ける、内大臣此こと
聞給ひて、おほきによろこひて、さてはその
ところの、主になるへきわれ〳〵にこそ
あらめとて、はかたの津を出て給ふ、

絵　山」3　舟」4　博多の老翁・旅立」5
内大臣、馬に乗り近江国甲賀へと急ぐ」6

あふみの国かうかのこほりへとそいそかれける、さてこの
こほりにつき給ふ、ちきやうせられしにもとより、ぬし
さたまらぬ所なれは子細なし、わうとにすむ身なれは
とて、ねんくを御門にそなへ給しかは、主さたまらぬ
ところをしつめ、年貢をそなふる事神妙とそゑい
かん有ける、かくて内大臣たもち給ふほとに、三人
の男子をまふけ給ひ、の給ひけるは、われ天ちく
にありしときは、大王につかへたてまつりしかは、内
大臣左大将たりしかとも、此国にて遠国のたみなり、しか
れは、国にも所にも、相應したる名こそよけれとの給ひて、
わか身はかうかの権守かねさたとかうし給ふ、ちやく
しかうかの大郎かねまさ、二郎かうかの次郎かね
みつ、さんなんかの三郎かねいゑとなのり給ふ、各々、
たけき弓とりにてそおはしける、大郎殿四たりはり
十四そく、二郎殿五人はり十五そく、三郎殿七人
はりに十七そくそい給ふ、かくして、権守は八十
三のよわゐをたもち給て御往生ありしに、
しよりやう三人のなんしにゆつり給ふ、大郎殿に
一千二百町、二郎殿に一千二百町、三郎殿に一千二百
町、みなとうふんにそ配分せられける、いま百ちやう
をは大郎殿にそつけ給ふ、たゝし、てうほうのきく
すいのはなたねと、しゆはんちやうのつえとて死人の

よみかへるたからは、大郎殿にも二郎殿にもゆつり」7
給はす、三郎殿にゆつりまいらせ給て、かくてよをた
もち給しほとに、あるとき大郎殿、舎弟二人に
相給ひての給ひけるは、これに人のあらそひ申候を
承候へは、やまとうみと、いつれかおそろしき物すみ候と
申すに、山まさりと申物候、海まさりと申も候、た
ふんうみまさりと申候は、かた〳〵いかゝおほしめし候と
仰られけれは、二郎殿打あんして申されけるは、
海こそわに・ふか・くちら・さちほこなとゝ申て、おそろし
きなる物ともはおほく候へ、山にはいつくに候とそ
申されける、三郎殿打案して申されけるは、二郎
殿仰候様に、海にはをそろしきおほきなる魚
なと候へ共、いかてか山にまさり候へき、山にはまわうの
物候し間、さらにたいあふすへきけたもの候はすとそ
申されける、大郎殿のの給ひけるは、かねまさいつ
れとも不存候、ゐさゝせ給へ、かゝるあらそひの、われらか
世にあるこそ可然事にて候へ、たつねて見候はむ、かつは
かゝるあらそひを、むかしよりきはめたる人候はぬに、
かうかの殿原かたつねきはめたりけるとつたへて
物語にもせられ候そかしとの給ひけれは、二郎殿も三郎
とのも、尤とそ申されける、されは、三郎殿申さるゝに
つきて、先山よりたつねて見候はむ、人々を出立給へ
とて、兄弟の三人の人々、おもひ〳〵にいてたち給ふ、
大郎殿二郎殿、究竟のゆみ□りえらひてあひ給て、」8
五畿七道・東国・西国・四国・九州・むつの国まて
尋給へとも、まわうの物すむ山そなかりける、すてに
三年八月七日と申すに、信濃国くろひめのひ
かしのとりゐのもとにつき給ゐて、ひるのかれい
をおこなひ給ひけるに、大郎殿仰られけるは、三郎か
儀につきて、此年月、にほん国の山〳〵をめくりて
たつね候へとも、つゐに物も候はす、せんするところ、
三郎ふしつのとかに、かのちきやうふんの所を取て、
われらはんふんつゝちきやうせんとの給ふ、三郎殿この
よしをきゝ給ひて、なけき給ふ所に、八十はかりの
おきな出てきたり、三郎殿おきなにとひ給ひけるは、
としたけたる人にておはしませは申候、もし
まわうのすむ山か、しり給ひ候らんと仰らるれは、
おきなの給ひけるは、若狭国からかけ山は、尋て
御覧候や、彼山にこそまわうのものは住なり、いら
すかたに・かへらすか谷とて、おそろしき名ある
所なりとそ申ける、三郎殿あまりのうれしさに、
しろきこそてをぬきてたひにけり、修行の人々
の前にまいりて、かくと申給へは、おの〳〵よろ
こひて、わかさの国へそ越られける」9

絵　魔王論議」10　同上」11
　黒姫の東の鳥居と三郎の知行論議」12
　三郎、老翁に魔王の所在を尋ねる

すてにくたんのからかけ山につき給て、この山の東の
方より、八十はかりの老翁、くみなわをこしにつけ、
おのうちかつきたるか、相たてまつりての給ひけるは、
とのはらはいつくへおはする人そ、これよりとく
〳〵帰り給へ、此山はまわうのすむ山なり、とのはらより
さきにいりし人も、かへりたる事なし、これともに
三とをしへたてまつる、をの〳〵よろこひて、くろひ

めのひかしの鳥ゐのもとにて、おきなのいひしは
まことになりけり、うれしさに、こそて一ツつゝぬきて
たひにけり、二日はかり、分入て見給へは、たてさま
七里、よこさま七里のはら有、すゝきかるかやもをひ
ぬ、あれはらなり、□な□□□□」[13]
ちかつきて見給へは、しやりかふへ・はこつともなり、
又それより十里はかり行て見給へは、又竪様七
里、横様七里のはら有けり、こゝにも小草もをいす、
[110]□中に、高さ十丈はかりのくすの木一本あり、
その木の中に、かみに五ちやうはかりあかりて、一の
さかり枝の、三方へ三えたさしたりける、此三の
枝に、三のやくらをそかきたりける、三郎殿これを御
覧して、こはいかに、人のかよへはこそやくらもかき
たりとて、南のやくらには大郎殿おはしませ、西の
やくらには二郎殿おはしませ、東のやくらにはかね
いゐ候はむ、いかなる人のやくらにてもあれとて、三
十三人の人々、此やくらにとりのほり給ふ、ころは
八月中旬なりけれは、月くまなし、三郎殿の下知
[120]にしたかひ、人々かたてやはめて相待給ふところに、
しか三十二三つれて出来たり、三十三人の人々、一ツ
つゝこそとめにけれ、ゐのこくはかりにおよひ
て、村雲さつとたなひきて、いかつちおひたゝしく
なりさわく、地しんけはしくて、天地ひとつになれと
こそもみけれ、人〳〵心はたけくおもひしかとも、
たましゐをけし弓矢をすてゝふし給ふ、やゝ
しはらく有けれは、つの三ツおゐたるあられ、
一むらさつとふりてはれ、月はもとのことくかゝ」[14]
やく、やくらの人〳〵すこし心ちなをして、かたて
[130]やはめてまち給ふ、ねのこくにおよひて、みなみ
のかたの山のはより、からかさはかりの雲たち
出ると見えしかは、ほとなくひきおひ、雲の上に
大音あつて、あら人くさや、よき人しきして、心ち
なをさんすらんうれしさよとて、やくらのうゑにまい
さかるかと見えけれは、大郎殿二郎殿二人の
人々、三郎殿はなきか、たすけ給へとそさけはれ
ける、そのとき三郎殿、七人はりに十七そく、しん
つのかふら矢をはめて、よくひきてはなち給ふ、て
もとにこたへて、物をこそゐおとしけれ、あくるをおそ
[140]しとまち給ふ、大郎殿二郎殿をはしめとして、三十
二人の殿原むなしくなり給ふ、三郎殿父よりゆ
つり給し菊水のはなのたね、しゆはん杖のつゑを
もて、みなて〳〵給へは、人々みなよみかへり給ける、
其後ほしゐあらひてすゝめ給けれは、人々本の
心に住し、天もあけゝれは、ゐをとしつる物を
見給へは、うてのめくり四尺八寸有ける、かひな
のゆひはおいたりけるをそ、ゐきりておとされたる、
人〳〵身のけよたつてそ見給ひける、三郎殿、
此てのぬしをたつねんとの給へは、大郎殿上下の人々
[150]みなおくし給て、かなはしとの給へは、三郎殿しきりに」[15]
すゝみ給へは、大郎殿二郎殿手をみてあれは主を
見たるおなしき事との給ふ、こゝに三郎殿、を
ちあひてくろひめのとりゐまへにては、まさしくふ
しつのとかに、かねいゐかちきやうの所をとらんと
仰候し物を、此てのぬしをたつねしと仰候はゝ、おそれは
候へ共、かた〳〵の御ちきやうふんを半分つゝ給て、かね・
ちきやうつかまつるへきにとの給ひけれは、大郎

殿道理につけて、しはらく思ひ案しておほし
けるは、かうかの物ともこそ、まわうの物を見んとて、
を[160]と〳〵はたつねんといひけるを、あに物ともおく
ひやうにして、つゐにたつねしといゐて、あまつさへ
所領をわかれてちきやうせらるゝなれと、人に
いはれん事こそ末代までも口惜けれ、命に
かへても、ゆみとりの名こそおしけれとおもひ返して、
さらはいさやたつねむとて、足のあとを見つゝ御
覧しけれは、よこさま三尺六寸、たてさま四尺
八寸有ける、跡を尋て見給へは、一二丈あゆみ
たるところも有、二三ちやうまたかりたる所も
あり、十里はかり尋入て見給へは、高さ四十丈、
よこさま四十ちやう[170]しほうなる、岩屋ひとつそ」16
見つけらる、いわやのくちにて聞給へは、おほき
なるいきをふきいたして、あらやすからすや、おゝ
くの人をとりてえしきにしつれとも、これ
ほとてこわき衆生にこそ、いまたあはさりつれ、そ
こはくの人たねをほろほしつる身つからか
てを、いきられつるやすからすさよ、こはいかゝすへき
とそたけりける、三郎殿此よしをきゝ給て、いか
なる物そ、此岩屋のうちにこゐするは、まえんの
物なりともはや〳〵いてよ、くわゐんをむすひて
[180]ゐるへきなりとせめ給へは、かなはしとや思ひけん、
十七八のおとこのゆうなるにへんして、せいかうの
大くちにしろかたなさして、こ竹のよこふゐさし
添て、つまくれなゐのあふきひらき、家の戸を
おし明て、いかに候とて、まことにうちゐみて対面
申、三郎殿けしからすと御覧しけれは、たし
かにおのれか本躰になれとせめ給へは、いかにかくは
おほせ候やらん、みつからは、此山のもくしたゆうと
申て八十あまりに罷成か、こにもくし三郎と
申物にて候なりと申、ゐて〳〵凡夫にてあるか
[190]なきか見とて、十七そくよくひきてはなち給
へは、ちのあひをつゝとゐつらぬかせ給て、うしろ」17
のいしのとひらに、やゆるきして立にける、きやつは
されとも、ちツともしらます、三郎殿弥々あやしく思ひ
給て、のこり三十三人みなゐ給へと下知し給ふ、
各々ひきつめ〳〵ゐ給ひけれとも、ぬきてはすて〳〵
しけり、三十三人のやめよりなかるゝちは、たゝう
かみにておしひたし、いつくに候、ほんふにて候物を
とて、ちともさはかさりけれは、三郎殿あらたてゝかな
はしとおほしてすかされけり、や、とのまわう、さなき
[200]たに、まゐんの物はつみふかきに、それほとの
てをおひてはかなふましき、本躰になり給へ、
われ〳〵見てとふらひ申さむとの給ひけれは、
すかされていつの間にかなりぬらん、そのたけ
五ちやうはかりたちあかる、八のおもて八はうに打
ふり、十六の眼を見ひらき、百のつのをふりたて、
ほんふの人、むしにあひてなのらしとおもへとも、よく
きけ、われはいかなるものとかおもふか、きまんこく
のぬし、八面大わうの三男麒麟王とはみつ
からか事なり、此山におもむきし事は、ちゝの
[210]大わうの、たうとのみかとの一のひめみやをとり
て、ひさうしておき給しを、あまりうつくし
かりしあひた、ぬすみてしきしたりしゆへに、」18
ふつほうにこまうなし、まわうにわうたうなし

とこそ申けれ、ぬすみこゝろ有とてふけうせられて、
此国におもむきて一千歳をへる、三万五千
さひに罷成なり、今五千歳をたもたせすして、
おのれかてにかかりて、四万劫をつくさん事の
かなしさよ、とてもおのれら一人ものこさす、えし
きにせんする物とて、三十三人の人々にかゝる、
おの〳〵[220]あやまらせられ給ふな、しりそき給へとの
給ひけれは、大郎殿二郎殿はしめとして、
五丈はかりのき給ふ、三郎殿にわうたちに
立給ひて、つるきに法をむすひて、きりんわう
になけかけ給ふ、つるきまいあかりて、きりんわ
うかくひを打切て、地には落す天にあかりては、
もとのことくにつかは・ゆんてよりうつもつかわり、
めてよりうつもつかはる、三郎殿つるきを
まねきよせて、法をよく〳〵さつけられたり、
釼しらますたゝかひたり、十八とまてそつきたりける、
されとも[230]とゝかさるをなりけれは、ちからおよはす、
猶もしもへはおちすして雲へあかる、むくろに
相ていひけるは、むくろとの、わとのは何になり
給はむそ、われは空にあかりて、あふ・蚊・のみ・しらみ
といふ物になりて、末の代の衆生をくわんと」19
おもふなり、むくろは、くちはみ・ひるといふ物に成て、
すゑの世の衆生をくわんとおもふなりとて、わとの、
そらにあかり給へと下にてこたへけり、さて、山の方へ
そさゝめきてはらはひをそする、さて三郎殿、舎兄の
人々に、麒麟王はつゐたうし候ぬ、此岩屋の内
に入[240]て御覧候へと申給へは、とこに候、おもひ
もよらぬ事に候、とのたにも入給はすとの給へは、三郎
殿、さらは入候はんとて入給へは、おり物のへりさし
たるたゝみ十帖はかりしきたり、したんのけう
そく、にしきのふすまを来（き）たり、これたゝいま、
きりんわうか住たる所と見えたり、あたりを
御覧すれは、あゆみの板三枚しきたる所あり、
三郎殿あやうしとおもひて、ひきのけて見給へは、
穴こそありけれ、三郎殿ゆみを入て御覧しけ
れ共、弓のはすもさわらす、三十三人の人〳〵の
ゆみ[250]のつるをはつして、のへてはおとし〳〵
きこしめしけれ共、おちつく所も聞えす、此
あなはきわもなく深き穴なりとて、かつらをたちよせ
てつきておとしけるほとに、七千ひろそおとし
たる、三郎殿のゝ給ひけるは、あゝゐゝしの穴の
深や、此あなの底にふしきは有らん、何として」20
か此あなのそこを見むとおもひ給ぬ、まことに
弓取は、四十八の案の有成物を、あんして見ん
とて一時案しての給ひけるは、此山に有らん
かつらをたちてこよ、たちよせて大つなをいくら
ともなくうたせて[260]、すかりといふ物を人二三人乗
ほとにこしらへて、大つなのすゑにつなかせて、
三郎殿、大郎殿に仰られけるは、此すかりにのらせ
給て、あなの底を御覧候へと申されけれは、殿
たにものり給す、われらのせん事おもひよらすとの
給ひけれは、さらはかね家のりてみ候はんとて、すかりに
のりつゝ、をとし給へ、もし穴のそこに、不思議も有て
帰らぬ事も有とて、まふりにはたのこそてを添て、是を
はきたの方へつけてたひ候へ、こしのかたなをは今年
四歳になり候亀一王にたひ候へとて、したひの形見をは

二人の舎兄にあつけて、すかりにのり給ふ、とりのへ〳〵[270]
おとしたり、陸地に落付給て、すかりの内をおりて
見給へは、我朝の月夜はかりのあかりに、南のかたと
おほしきところに、あゆみ入て見給へは、御所つくり
して人のすむていなり、いりて見給へは、一のつほねは、
かうらひへりのたゝみ百帖はかりしき、から草つけ
たる、こいくれなひのにしきのへりさしたるたゝみ、百帖
斗敷たり、七ツ八ツ十二三はかりのわらへを、ぬかこさし
にさして、百くしはかりをきたり、二十四五、三十四五、四十
よりうちの女房をは、人ふくさといふ物にして、百」21
れんはかりあみかけたり、七重の屏風、八重の几帳[280]
まん、十重のみす打あけかきあけ、七のつほねいち
〳〵に見給へは人もなし、かたはらにて聞給へは、年の
程十二三はかりとおほしきひめきみの御こゑにて、
法花経をよみ給ふ、三郎殿あやしみ給ひて、内に入て
見給へは、ひめ君十二ひとへをめして、水精の珠誦を手
にぬきて経をよみ給ふ、三郎殿御覧して、まゑんの物
にてそ有覧とて、三尺二寸の太刀をぬき、さしあてゝ
仰られけるは、まゑんの物ならは、たしかに本躰になれ、
其儀なくは命をたゝむとの給へは、われはまゑんの
物にても候はす、日本国の花の都に、一条の大納言[290]
の嫡女にて侍りしか、此所のぬし麒麟王にとられて、
此としのほと打こめられて候間、日本の人と見たて
まつれは、あまりになつかしくこそおもひまいらせ候へ、
あひまちせさせ給ふなとかなしみ給へは、三郎殿も
さすかにあはれとおほして、まことにさることも有覧、
さらはたすけたてまつらんと、きりんわうをは打て
候そ、日本国へ帰り度おほしめさは、帰し可奉と
被仰けれは、姫君悦給ふ事かきりなし、さて、三郎殿
とすかりにのらせ給てあからせ給ぬ、おもはすにひめ[300]
きみ、なけき給ふけしき見えけれは、三郎殿、こは
いかに、穴のそこの御栖の名残おしくはしおほし
めされ候や、そのきならは、やすきほとの御事に候、
帰し入たてまつらんとの給へは、ひめきみ涙をな
かしの給ひけるは、其儀にては候はぬ、父より」22
給りたりしやつ花かたのからの鏡を、金のて箱
に入て錦七重につゝみて、命とともにおもひて
すこしも身をはなさすかたはらにをき候つるを、う
れしさのこゝろまよひのあまりに、とりおとし候か
心にかかりて、あまりにかなしくおほえ候と仰せ
らるれは、三郎殿けにもとおほして、さらはやすき[310]
ほとの御事なり、かねいゑ入てとりて参せんと、又穴の
底にそ入給ふ、ひめ君のおはしつるかたはらに、
あんのことくかゝみ有けるをとりて、あからんとし給し
に、大郎殿、二郎殿に仰せけるは、比ひめきみを見るに、
まことにうつくしきひめ君なり、三郎殿さる物なれは、
いかにいふともわれらにあてつくへからす、わか取て
あかりたれは、我しんたひにせんとこそ申さんすらん、
されは三郎殿をは、此穴のすかりにせさせんとおもふは
いかに、はからひ給と仰られけれは、二郎殿、ともかくも
舎兄にて渡らせ給へは、御めひをはいかてそむき申[320]
へきと申けれは、大郎殿よろこひて、すかるのな
わをあなのそこにおとし入給ふ、三郎殿のり給て
いつかひきあくると、しきりになわをゆるして待給ひ
けるに、おもひのほかになわをおとしける、三郎殿かし
こきをのこにておはしけれは、いかさまひめ君にこゝろ

【もイ】

さしをなして、しやきやうの人〳〵のはからひなりと」23
推して、天にあをき地にふし、なけき給ふ事
かきりなし、さても有へきならねは、三郎殿すかりの内
をおり給ひて、せめての又御所へ入て、ひめ君のおはし
つるところを、こま〳〵と御覧しけれとも、なく[330]
さむたよりもなし、しかひせんとし給へ共、かたなも
形見にとゝめつれはなし、たゝなき給ふより
外の事そなき、なみたのひまに、かたはらを御覧し
けれは、あゆみのいた三枚しきたる所有、三郎殿
あやしみをなしておもふかこゝろくるしきに、此穴に
身をなけはやとおもひて、西にむかひて高聲に
念仏となへ給ひて、生年二十五と申せしに
つゐに入給ひける、[338]

絵　山の老翁」24　弓持つ武者ども」25
荒原に白骨・どくろ」26　同上」27
鹿数多出現」28　樹木」29　鬼（麒麟王）出現」30
（雲の上に大音あつて麒麟王現われる）
かなはずとみて禪鬼・弓矢」31
麒麟王、優なる男に変化す」32
三郎剣、麒麟王の首を切る」33　穴入り論議」34
（人穴に入らんと三郎、兄二人に北の方及び亀一
へのかたみを託す）
かづらをたち集めて三郎、すがりに乗って穴入り」35
姫とすがり」36
（人穴の底に法華経を読む美しい姫君がいる）
神社（建物右半分）」37　神社と穴」38
南方神社縁起書　上巻奥書」39（下段参照）

于時天文十二年□卯十月八日
大隈国筒羽野村於新山寺
諏訪御由来之絵縁起末代之
為興隆書写了

絵師迫田采女正酒井宗清
意趣書染筆権少僧都聖誉

右此絵縁起者　大願主　千代太輔
　　同　助七
奉加之人衆

当所代官青山豊前守藤原照續
新蔵坊　頼昏
吉松民部少輔殿　石川　常陸守
　　同七郎左衛門尉
新山寺光金
　　当社祝　次郎太輔
時大宮司松井伯耆守　義次」39

平成二十一年二月
柳原由美
吉田千春　校

石川本　下巻

□いかなる高きはんしやくにか、あたらんすらんとおもひ
しかとも、さはらすして、いくせんはくともなくお
ち給ひ、あまり久しく落給ひけれは、うつ
ふしになりあをのけになり、そはさまになり落
給ひ、たま〳〵たてさまになる時に、左右の手を
ひろけて見給へは、てにあたる所もなし、三年三
月におつといふ、八万地獄におつるなりと思ひ
給ふそいとをしき、良久敷をちさせ給へは、ね入
てはおち、驚てはおち〳〵せさせ給へは、いかなる
岩尾をしやくまくにか身を打あてゝ、そんすへき
とおもひ給ひしに、思はすに木のはましりのこ
すなはらにそおちつき給ける、しはらく心を
しつめて東西をきら〳〵と御覧しけれは、我朝の
ことくに日月ほこたてはかりゐて給ふ、去程に南
の方に道あり、此大道を北に向てあゆみ給ふ、ひと
時はかりあゆみ給ひて、くぬ木はやしの中へ行
□て給ふ、□木□覧□けれ□、我朝の□□□
似す、高さ六七百丈、むけのこきと思ひ二三百
丈と見えたり、かゝるくぬ木はやしの中を、七」40
里半はかり行給て御覧しけれは、東より
西へ道あり、かゝる大道のつしに行出給ふ、三郎殿
心の中に思ひ給ひけるは、六道の辻とは此辻の
事にや、我朝にこそ人の語しは、西をこそ浄土と
いひしか、おなしくはつみのほとはしらねとも、浄
土へとこそ参らめと思ひ給ひて、北にふみたる道を
すて給て、にしの道へそ行給ふ、四五里かほと
行給へは、山川のはたへそ付給ふ、なかれにつきて
里は有らんと下給ふ、七日行て見給へは、あは
畠に行出給ふ、粟の様わか国の粟にはにす、
たかさ四五丈ありけり、穂のなかさ四五尺、六七尺
はかりそ有ける、粟のつふのせいは七寸五分そ有
ける、あは畠の中に高さ十丈はかりのいほ
やくらをかきて、八十はかりのおきなの、七まかり
八まかりのまゆみ・すゝけたる矢を一二とり
そへて、粟穂のしゝをあれ〳〵とおふ、三郎殿立
より給ひて、いかに翁との物申候はん、某は
何所よりいつくへ参て候つるそとの給へは、
翁申されけるは、けうかる殿の言葉かな、」41
来たりたる道を殿たにもしり給す、おきなは
何とてしるへきそ、抑殿は何所の人そととはれ
けれは、三郎殿、日本国の物にて候そとの給ふ、さる
国しらすとの給ふに、三郎殿、まさしく候物をとしき
りにの給へは、翁、いてさらは倶舎を引て見んとて、
倶舎をひきて見るになしとの給へは、いと心よはく
思ひ給て、まさしく候物をと重而の給へは、翁、
能々見とて委敷見給て、須弥の南閻浮
提にあたりて、小嶋一ツありと見えたり、此嶋は
国にはほそし、しまにはおほきなり、日本とも秋津
しまとも名付たり、さては殿は彼国の人かと
仰られけれは、さ候とこそ申されけれ、おきな
あはれみ給て、さそつかれにのそみ給覧と、あはの
しゝをおひ給へ、翁か宿にかへりて食をもとめてま
いらせんとの給へは、三郎殿悦ひてやくらにのほりて、
しはらく有て尾かしら五ひろはかりのしゝ出

来り、粟のほをはますして、やくらにきたりて
三郎殿にむかひたり、三郎殿、あれ〳〵とをわせ給へ
とも、鹿すこしもさはかすしてちかくより
けり、三郎殿弓とり矢をはめひかんとし給へ共、
此問のつかれにひきかねてそおはしける、三郎殿、」42
せめての事に足にてひきてはなち給ふ、眼のかた
間をゐとをし、しろけのもとにつゝとゐ出し給ふ、
一足もひかすまろひぬ、翁今や〳〵と待給ふ、
翁物を持てきたり、見給へは、もちたる物はになひ
たはら二と、くみなはと腰につけて、かま二ツ手に
持てきたり給ふ、三郎殿はいとゝ心よはく思ひ給ひ
けり、翁、日本の殿、これへおり給へとの給へは、
いそきやくらよりおり給ふ、翁の給ひけるは、おはに
申合候へは、これにとゝまり給ふ人ならは申に
をよはす、日本国へ帰り給ふへき心さしあらは、此国
の物をすこしも食し給ふましと申すなり、いかゝ
はからひ給ふとあれは、三郎殿、生土にて候へは、日
本へこそ帰り度候へと申給ふ、さてはあのしゝ皮を
ならし給へ、何にてならし給ふへき、これにてならし
給へとて、二ツのかまを奉り給ふ、三郎殿此かまを
得給て悦ひ、我朝にて見ならひ給しかは、ならし
給ひて四のゑたをおろさせ給て、にけをこんたひ
とりおこなひ給ひて、うゑをやすめ給ぬ、三郎殿、翁
殿に物語し給ふ、此国をは何と申候そととひ給へは、
此国を[は野]への国とも申也、ゆひ[まん]国共申也、
□国□□祢の国とも申也□□□□□」43
此国よりにほんにかよはせ給ふ道候やととひ給へは、
いくらも道は有、日本の垂跡たちの祢の国へかよ
はせ給ふ道八十六候そ、其中にちかき道は、熊野
権現のかよはせ給ふ道こそ直道なれ、それなん十
里はかり候やらん、なん十里とはいかに、よく聞給へ、
ちかきちやう九十年の道そかし、それをはいかゝ
して命の内に行つき給ふへき、ふしきにさる
事も候けるとて、あのしゝをやゐかわにし給へとて
やゐかわにし、たて横一寸に切おきてかそへ給へとて
かそふれは、四百八十六枚にそかそへたる、になひたはらに
せよとて、たはらにてせをはせ奉りぬ、我朝にては
いつならひ給ふへきに、いとをしき有様なり、されとも
日本の恋しさに、くみなわもつらからす、翁の給ひ
けるは、あひかまゐて行給はんするに、七日行て
是を一切（ヒトキレ）くゐて、水三すくひまいり〳〵して行
給へ、此四百八十六枚のやゐかは、みなになりたらん
時、日本へつき給はんするなりとの給ひけれは、
三郎殿よろこひて承候ぬ、七日〳〵のさかひ候はん
するやらんと申給へは、七日〳〵の道のさかひ候はん
するなり、かならす清水の候はんするなり、七日より
中には水候はぬそ、いつみをしるへにて行[陷入]、」44
かまえて〳〵此国の物はし、草葉にても候へ食
し給ふな、さあらんにつゐては、日本へつき給ふへ
からす、くるしくてやすみ候はんには、行さきを枕に
なして、足跡をはし[り]になし給へ、かまえて
跡を見給ふなと、念比におしへ給ひける、日本に翁か
めひのもとに文をつかはさんとて、紅梅の檀帋
ひとかさねて取出て文書給ふ、
恋しくはとひても来ませ大和なる
三輪の山もと杉たてる門

とかき給ひて、三郎殿に参せ給ふ、たしかに
おさめ[450]給ひけり、三郎殿、此老翁に能々
暇乞て行給ふ

絵　三郎と」45　矢倉に鹿追う地底国の翁の出会い」46
三郎、矢倉の上から」47　鹿を射る」48
三郎射とめた鹿をならす・帰国」49
三郎、翁の教へに従ひ、鹿の焼皮を負ひ、帰国の旅のさま、
地底国より浅間山に穴出」50
（七日目に清水あり、三郎翁の教へに従ひ、
鹿の焼皮を食し水を飲む）
（四百八十六枚の焼皮食べ終へると、
三郎まもなく穴の出口に出る。）
地上に穴出後、牛」51　を追う商人に時と所を尋ねる

道は木のはましりのこすなはら、あゆみよき事
かきりなし、いまは七日来たるらんとおもはしき
所に、けにも清水あり、是にてこそ有らんと思ひ
給ひて、爰にてやゐかわを一きれ、しみつみすくい
おこなひ給ひて行給ふ、かくしつゝ次第に月日
経けるほとに、四百八十六枚のやいかわもみな
に成にけり、此やゐ皮みなになるまてとこそ
翁の給ひしか、されともいまた日本へはつき給はぬ
事[460]のかなしよ、能々翁のふひんにし給しに、
祢の国にもとゝまらす、途中にてはてん事
よとなけき給ふことなのめならす、誠にことはり也、
かなしみなから、行給ふほとに、なみたの隙より
行末を御覧しけれは、まどのあかりの様にほの
かにあかく見えける、三郎殿いさみをなし給ひてあ
ゆみ給ふ程に、竪様七尺横様七尺四ほうなる穴
の口をつと出て見給ひけれは、いつれの所とは
しらす、山のいたゝき遠くなり、東西をきら〳〵と
見くたし給へは、日月ほこたてはかりそ出て」52
給ふ[470]、南のかたを見くたして御覧しけれは、
松はらしけりて眇々たり、にしのかたを見給へは、
人里つゝきてゆう〳〵たり、南のかたへ木こり
道のほそみちひとくたりあり、彼道をくたりに、
みなみへ御下給ふ、四五里かほと下給ひて、東
より西への方の大道あり、彼大道を東へ、商人
二人、牛にひき、しほつけて、一人は三十四五、
一人は二十四五のあき人、せひやほいにて出来る、
三郎殿よつて仰られけるは、な、物申候わんと
の給へは、商人、何事候そとこたふれは、とひ
ける[480]様は、とれよりとなたへ身はきたりて候そと
いわれけれは、商人申けるは、けふかる殿のとひ
様かな、来たる道を、わとのたにしり給はす、いかにして
其外の人のしるへきそや、ほれたり〳〵、あら、ほ
れたりとそ申ける、三十四五の商人申けるは、
わとの、なさけなき事をの給ふ物かな、色をも
香をもしる人そしるそかし、我等か様にはい
〳〵してあり国しらす道しらぬとまりにてとふに、
委敷人のあかしたるはうれしきそかし、
そのやうにあの殿も宿をしらすしてこそゐて」53
給ふらめ[490]、これこそ日本国信濃国あさまの
嶽なきの松はらよといへは、あなうれしや、さて
ははや日本につきたるにこそあんなれ、我等か

狩して帰りたるなきの松はらにこそと思ひて、
よろこひ給ふ事かきりなし、又三郎殿とひ給ゐ
けるは、今日はなん月いくかの日にて候そ
ととひけれは、又廿四五商人申けるは、ちた
いわとのはほれたるな、あ、ほれたりと〳〵、よくほれ
たり、や、との、今日此比はむまれおつれは、昨日
今日をもしるそかし、こへんのとしにて十
月の日の移りかわるをしらぬか、六月一日とは
今日そかしといゐてそ通りける、二人のあき
人のおしへにこそ、六月一日、日本国信濃国
浅間のたけ、なきの松原ともしり給へ、あさ
まのたけには三ツの穴あり、一ツのあなはとか
くしの権現の祢の国へかよわせ給ふ、一ツの
穴は熊野権現の祢の国へ直道にかよわせ
給ふ、此なるなか穴よりあな出して、さく・ちいさ
かた・きそちにかゝりて、近江国へとそいそかれ
ける、日数つもりしかは、おなしく十六日夜半
はかりかうし（江州）やうかうかの御□□□」54
給ふ、南西のひろえんにのほり給て、つま戸
をたゝきていらはやとは思ひ給へとも、人誠とも
いはし、明てこそと思ひて、あくるをおそしと
待給ふ心の内こそいはんかたなけれ、すてに鳥は
しきりにつけ渡り、明方ちかくなりけるに、
三郎殿の御嫡子小太郎殿、わらへ名は亀一とて
おはします、ね覚して、はゝ御前へあひて御物
かたりありけるは、な、はゝ御せんきこしめされ候へ、父にて
候人には、かねつくかいくつのとしわかれ奉りて候
けるやらん、われ来たりと仰候と思ひて、おとろきて
候へは見え給はす、誠にて候やらん、此世に無人の
罪の深きこそ、をやこ親類の夢にはとふら
われむとて見えけるなれ、もし御つみはし
ふかくおはしまし候にや、御けうやうは心の
およひ候ほとはつかまつりて候へは、さりともとこそ」55
思ひ参らせ候へ、南無阿弥陀仏〳〵と申て、父の
ためと廻向し給ふ、さて、はゝのの給ひけるは、父は
わとのか四歳に成し時、二人の舎兄に相て、海
山のおとりまさりの、おそろしき物の有なし、あら
そひ給しに、わ殿の父は山まさりといひけるに
依て、まわうの物を見んとて山〳〵めくりけるに」56
山にてまわうの物にとられて帰らぬとこそい
ゐしか、二人の舎兄は帰り給ひし也、わ殿
年をかそふれは、今年三十八になり給ふとおほ
ゆるとて、かたり給ひけれは、あなむさんや、さて亀一は
三十八になりたり、さんなれは、いかなる野ゝ中・山の
すゑにも持へき物は子なりけり、かね家一人の
子をもたすは、誰か只今父のためと念仏申て
えかうすへき、是に付てもわれきたりといはゝや
とおほしけれとも、人うつゝとおもはし、我等か
語りつる事を聞て、まわうの物のへんして
きたらめとて、用る事あるましき、あくるましき
夜ならはこそと思ひて待給ふ程に、五更の
天も明けれは、三郎殿後見ゆき家と
いふ物有けるか、早朝に参りて、今日は御つくり
の田の草とらせんといひて、南の妻戸をひら
きて、ひろえんにつとゐてゝ、三郎殿を只一
目見たてまつりて、あなおそろしやと申に、

女房たち何事なるらんといゐけれは、只今広
えんに出て物御覧候へといゐける、女房たち
二三十人はしりいてゝ、ひろえんにおはします
三郎殿を見参らせて申けるは、あないふせの
おほへんひや、世の中ひろけれ共、かほとのおほ」57
へひをも見つるかな、へんひはふとくして
なかくこそあれ、此へひはふとみしかし、是こそ
人へひといふ物にてあれなとゝいゐけれは、三郎
殿仰られけるは、いかにやれ、おのれらはかね家
をへひと申そとの給へは、女房たち申されけるは、
こゝなるへひの物いへは、人をのろふそ、人のろふ
へひはからきめ見せんとて、つはきをさん〳〵に
はきかけけり、又何所も人の御内に、けすおんな
のこさかしなさは、其中に小さゝといひける
けす女ありけるか、いて〳〵聞ゆるおほへひ
見んとて、ひろえんにはしり出て三郎殿
を見まいらせて、あないゝしのおほへんひのふとみし
かさや、人へんひなんめりといふを聞給て、三郎
殿、いかにやれ、先祖相伝のをのれかせうなりあるを、
かくは申そふしきなりとの給へは、こさゝ女、こゝ
なるへんひのせめての業のふかさは、ひろえん
に出てこうさらして、あまつさへ人をのろふは
いかに、ゐて〳〵其儀ならは、わへひめ、みしめ見せん
とて内にはしり入て、やをそきからに火を
つけて、竹のさきにつけて、三郎殿の御はなの」58
もとにさしつけ〳〵、あはれなるほとにそふす
めたる、三郎殿こさゝにふすめられて、いかに
やれ、おのれらはふしきの事をつかまつるそと、
の給へともかなはす、こさゝかさねて申けるは、
爰なるへひかふすふれ共物ともせす、弥々人を
のろふふしきさよとて、さん〳〵にふすへける
こそふしきなれ、さてはわれはへひのたひに
なりたるこさんなれ、かく有へしとしりたり
しかは、なにしに古郷へ帰りて二度物を
おもふ覧、翁のさしも能々あたり給ひしに、
祢の国にてともかくも成へかりし身の、せん
なき遠国を恋て古郷に帰り、へひと
いはるゝかなしさよとて、こさゝにふすへられ
て、なく〳〵えんより下におり給ふ御こゝろ
の内こそ哀なれ、去程に十斗、十二三のわら
へ十人はかり、はしりきたりて申けるは、
いかめしのへひのおほきさよ、人へひにて有
そとてあさみける、又、三郎殿の、いかにおのれらか
先祖のせうにてわたらせ給ふそ、見しり参せん
ふしきさよとの給へは、わらへ、こゝなるへひ」59
の人のろふはいかに、辛きめ見せんとゐゝて、さん
〳〵にさひなみけり、何として我身はへひ
になりにけると思ひて、なく〳〵門よりとく出て
給ひて、大道にうつふしてやすみ給ひけり、三郎
殿の心をかへておほしけるは、われらかくて
こゝにあらは、大道を通らむ人〳〵に、大へひ
有とてよけ道せられんもつみふかしと思ひ
て、大道より南のかたに、大なるつかの有けるに、
あゆみよりてこそ、うつふしてかなしみ給へ、さる
ほとに、十七八はかりの女房申けるは、あないゝ
しや、造立し奉る御たうの結構おもし

ろさよ、御佛のたつとさよと申ければ、廿四
五はかりの女房、いまたわこせんはしらすや、あれ
こそかうかの三郎殿の嫡子にかうかの小太郎殿
の、父の三十三年の深き孝養（供□□）のために、つくりたて
まつりたる観音たうよ、ほとけはけん仏にて
まします、衆生のねかひをみてさせ給はすといふ
事なし、観音の御利しやうはいつもと申
なから、六月十七日なれは、夕さりはおもひ〳〵に所望
申さんすらん、あなたつとやとて、ふしおかみ
てそとをりける、三郎殿是を聞給ひて、いかなる
野ゝ[す]ゑ山のおくにも、もつへき物は子也」60
けり、かね家一人の子をもたすは、誰かかゝる供養
をはすへき、かねいゑかためにつくりたる御佛
の、人の申ねかひをかなへさせ給ふ覧、まつ
たつとさよ、それにつけても参り、へひのすかた
をいのり申さんとて、つかの本をは出て給ひて、
御しやうめんにてきねんこそふかかりけれ、
大慈大悲の観世音、ねかわくは本誓の悲
願、へんひのたひを引かへて、かね家か本躰の
凡夫のかたちになし給へと、三十三度のをかみ
を申て、卅三巻の観音経をよみ給ひて廻
向したてまつり、なく〳〵祈精申されけり」61

絵　童ども、蛇体の三郎をいたぶる」62
小笹女、三郎を火でふすべる
女房たち観音堂の由来語る」63
老僧と若き新発意、根の国など問答す」64

われはかくてしやうめんに有ならは、夕さり参り
たらんする人におちられぬへし、ほとけ
のおほしめさん事も罪ふかしとて、縁の
下に入給ゑて、ほとけの佛檀のしたにて
祈念あり、へひのすかたかへさせ給はすは、
命をめせとそいのり給ふ、去程に、日も暮かた
になりぬれは、数万人参りあつまりて、経を
よむ人もあり、念仏を誦する人も有、おかみ
申人もあり、思ひ〳〵心〳〵にたつとくそ聞え
し、夜も深かたになりけれは、人〳〵の中
より物かたり一ツはしめたり、其中に大みね
とをりたる御坊たち、十人はかり参られ
たり、たつとき事ともかたり給ふ、中に十七八」65
の新発意申けるは、かゝる所に参りて
こそ、なにともなき事共申出し候て、あらん
さんし候へ、さいかくになり候へ、此国より外に
国候はんやらんと申けれは、六十斗の老僧、
此国のほかにはいくらもくに有、倶舎といふ
物をよみ給はんか、御坊、いつくに候いまた見すと
こたへ給ふ、さてはしらぬ道理なり、いて〳〵
結縁のために、すこししやくしてきかせん
とて、おひの中より巻物一巻取出して
よまれたり、十六の大国、五百の中国、せん」66
のほかの国、無量のそくさん国なとゝ
申て、国のおほき事かきりなし、東州の
人は三百年、西州の人は三百六十年、
かくのことくいのちなかし、此国に南州の
人、定命六十年とは申せしかとも、生て

三ツ四ツにてしするも有、三十廿にてしするも
あり、十七八にて死するも有、おひかゝまりて、わか
きをさきにたつるも有、定なき生老病死の
ならひなれ共、経をよみ念仏を申ねかへは、かな
らす往生するなりとこそよまれたれ、北」67
州の千年と申、生れて三月を一年とし
給へは、北州の千年ほともなしと申なり、
彼国の人は、五百年はわかまゝにてたもち、
子をうみ候へは、子か成人すれは、五百と申
としより子にかかりて、四百五十年をへ
ぬ、九百五十年をはかくてすきぬ、いま五十
年はふそくにして、子かあつて、四百五年は
かけたてまつりぬ、いまはやしなひ□奉た
よりも候はすとて、おやを追いたし候なり、
親は子にをい出されて九百五十に成ぬれは、
としは行、さきへも行す、あとへも帰らす、
たゝいたつらに影のやうにやせおとろへて、かな
しめとも彼国のならひにて、ゐたる所をはな
れぬれは、か様におとろへかなしめとも、あはれ
むさんとて他人は物もあたへす、されとも、
物くわねともうゑてもしなす、かなしみなか
ら、つゐに千年を経てしにけり、されはつみ
ふかき事余州にすくれたり、御はうとてそ
よまれける、又しんほつ申けるは、是はかく
承候ぬ、是より上に候はぬかや、うゑにもいくら
も候、夜摩天・都率天・忉利天なとゝて三十
三天、此等みな世界なれは国なりとそよみ給ふ」68
又しんほつ、かれは承候ぬ、此日本てらさせ給
月日は、何所の国をめくらせ給ひ候そと申せは、
須弥の山を堺として四州をまわらせ給ひ候也、
北州はにしより日出てひかしに入給ふ也、あれの
ひるは是のよる、これのひるはあなたの夜なり、
神通方便の身をうけて国土を照し給ふ、
日月たにも衆生のくゑとのために、一時のひま
もなくおはします、須弥山をさかひとして、明て
も暮てもやすますめくり給ふ、まして凡夫
の身に、物のくさきひまなきなとゝは、もろ〳〵
申間敷事にて候そと、御坊よとよみ給ふ、
新発意、これはかく承候ぬ、此国の下には候はぬ
やらぬ、是より下にも国あり、祢の国、ゆいまん国とて
候そかしとの給へは、しんほつ申されけるは、道はこの
くによりかよひ候かととひけれは、道はいくらもあり、
我朝のすいしやくたちの、一度野辺の国へかよひ
給ふみちは、八十六あるそかし、神の一年に一度、
彼国にまし〳〵たるあとに、衆生の参りて、所望
事をいのりしにかなわねは、けんもおはしまさぬと
申てうらむる也、あるしなき家に行てようしよ
をいへとも、人かあらはこそ返事をも用所をも」69
きかめ、そのやうに神もおはしまさぬやしろに
参りて、申時きゝ入給はぬなり、かゝる事をしらす
して、その神は人の申事なとをかなへ給はぬと、
うらみ申ましきにて候そと説給ふ、さて其道は
なん十里はかり候や、事もおろかや、百五十年・
百六十年・百三十年・百二十年の道也とそ
よまれける、其中にちかきも候やらん、我朝
熊野権現の、すくに野辺の国へかよわせ給ふ

道こそちかけれ、それはなん十里候や、なん十里
とはいかに、それ、ちかきちやう九十年の道なり、其
道より祢の国へかよひ候事候なんや、むまれて
いかに候はんより行とも、行つくへきかやとそ説給ふ、
さも候へ、ふしにてさる事候てんや、かしこうふしき
にては行事も有こそせめ、さて行ては是へ帰り
候てんや、それは行つきたりとも、帰りおもふましき
なり、神のとにておはしまし候へは、神の本地は
へひ・しやにておはしまし候へは、かみのまいる物を
食[72]してあらんにはかへるまし、さてふしきにて、
日本の物をくうて帰らんにはいかゝ候へき、それは
帰らんするそとよまれたり、又しんほつ、此国の」70
物をくうて帰りて候はゝ、此国の親類兄弟なとの
見しり候てんや、あの国にてきたる物をぬか
すは、しるましきなり、人にて有ともきたる
物は、へひと見えする也、御はうとそとき給ふ、
三郎殿是を聞給ひて、あなうれしや、かね家
は観音の御りしやうはやかふゝり、これかれこそ
御たくせんよとよろこひ給ふ事かきりなし、
あはれはや夜の明よかし、わかきたる物をぬき
すてゝ見んとおもひて、あくるをおそしと待給ふ、
はや夜も明けれは、参の人下向しけり、えんの
下をくゝりてゐて給ふ、き給へる三ツのこそ
てをぬきてすて給ひ御らんすれは、あせのろしと
いふみすちのへひとなりて、三方へ行うせぬ、
三郎殿、これほとかゝるおそろしき物をき
て有けるそや、昨日のあした、おちられけるも
ことはりなりとそおほして、えんにはたかにて、こし

うちかけておはしける、去程に、御たうのうしろ
とより[74]、六十ゆうの老僧、くろころもき給ひて
通り給けるか、三郎殿を見つけ奉りて、いかに
殿、はたかにておはしますそと仰られけれは、ゆふへ
この御たうに参りしほとに、あの山のさきにて」71
ひつはきに相て、はかま・き物をみなはきとられ
て候、さやう御渡り候へは、めしかへのかたひらや候、給候
はんとの給ひけれは、まち給へとてあんしつに
入給、しろきかたひら一ツとりゐたして、三郎殿に
参らせ給ふ、三郎殿是を給はりてめし、その日は
十八日なりけれは、観音講おこなひ給ひて、かうかの
たち[75]に二三百人のかうしゆ有けれは、見くるしと
おもひ給て、さうなく入給はす、すひかきのきわに
忍ひて立給ふ、きのふのあしたおひたりしゆき
家、小大郎殿の後見なりけれは、よこさにこそ
ゐたりけれ、三郎殿を見つけ参らせて、さし」72
きをたち、えんよりしたにはしりくたり、
三郎殿の御たもとにとりつきて、こは夢かやと
涙をなかして、三百人かうしゆ、一とうにていし
やうにくつれおちかしこまつて、いかなる御事
そと申けれは、ゆき家なく〳〵まいり、きたの
かた[76]小大郎殿にかくと申せは、たゝ夢の心ちして
うつゝともおもはす、さりなから天魔外道にても
あれ、まさしき三郎殿に御対面、たいにておはし
ますなれはとて、いそきわたりて、北のかた小大郎」73
さうのてにとりつき、うれしきもなみた、つらきも
たゝ涙をおさへて、有しむかしの事共をの給ひて、
二人の舎兄にあひてあらそひの事、からかけ山

にてきりんわううち給こと、あなの中の
ひめ君のかゝみゆへに、二たひ穴に入給し事、
さてしやきやうにすてられし事、昨日のあした
へひとてうたれ給し事、ゆふへ御たうに参て[770]
観音の御りしやうによて、いしやうをぬき給し
かたりけれは、一日一夜そかたり給ふ、さても大郎殿
二郎殿いまたおはしますか、さん候と申、舎兄
にてもおはしませ、此とし月のむくゐをしらせ
申までは、しこそあるましけれとて」74　【字母　志・】

絵　三郎蛇体を脱す」75　老僧、裸体の三郎に衣類を与える」76
故郷甲賀にて家族に再会、兄の館へ一騎にて押寄せる」77
兄二人、双六盤上にて自害」78　同上」79

らうとふ一きもくし給はす、たゝ御身一騎にて
大郎殿のたちへおしよせ給ふ、えんのきわへ馬
うちよせ給ふ、あふみふんはりつゝたちあかり、
ゆんつえをつゐての給ひけるは、かうかの大郎殿
二郎殿[780]おはしまし候やらん、ゐてさせ給へ、見参申さむ、
かく申物をいかなる物とかおもひ給ふらん、ひとゝせ
若狭の国からかけ山にて、きりんわうか岩屋の
うちにすてられ給ゐし、かうかの三郎かねいゑ
こそ、ふしきにけふと申すに参り候へと、大をん
あけての給へは、上下あはてまとふ事かきりなし、
はや〳〵御ゐて候へ、見くるしく候物かな、おそく候
そとせめ給ふ、折節大郎殿二郎殿すくろく
うちにおはしけるか、此よしを聞、おほきにおとろ
き給て仰られけるは、物きゝ給へ二郎殿、三郎殿
[790]のわかうち出ていくさするとても、打かたん事
千萬にひとつも有へからす、いさやしかいせん、二郎殿、
もつともかう存候へとの給て、こしのかたな」80
をたかひにぬきちかへ、すくろくはんの上にてさし
ちかへてそうせ給ふ、三郎殿此事を見給て、いかに
一旦のうらみをこそ申て候へ、御しかひ候事よとて、
なけき給へとかひもなし、さて有へきならねは、
やく・いにおはりたてまつり、ふもとの霞とやきあけ
ほのをとしめりけれは、こつをひろい御廟に
おさめ奉り、三郎殿わかたちへ帰らせ給ひしに、
岩屋[800]のうちよりとり出しまいらせ給しひめ君の、
そのときも十二三にて見え給ひしか、今も十二三
のよわひにていてさせ給て、三郎殿にあひ参らせ
て仰せ有けるは、いかに〳〵三郎殿、いままてわらはゝ
是にあり、とく帰りぬへかりしとも、殿の入せ
給ふを待まいらせてかへるそ、わらはゝいかなる物とか
おほしめす、いまは何をかかくし申へき、わらはゝ
誠の凡夫にてはさふらわす、大和国杉たてる門の
ひめみや大明神とは、みつからかことにてさふらふそ、
鏡は鬼にとられけるかとそおほしめすらん、
みつ[810]からかおにゝとられしゆへは、わらはか見め
かたちよきとて、日本の垂迹たちのふさひに
せんとて、きよしやふをかよはし給しかとも、もち
ゐさりしによつて、すいしやくたちはらを」81
たゝせ給ひて、きりんわうにとらせて、岩屋の
うちに三年かほと打こめてをかせ給ふを、わら
はかおちこせんおはこせんをしゆきに、あのひめ
みやを岩屋の内にてはてさせ給ふへきかとの

せんきありしとき、わかわかおちこせんかまし
の大明神の仰に、たゝし麒麟王をつゐたふ
すへき物は、かうかの物ともこそあるらめとて、
かうかの物ともにたましゐを入よとて、殿原に
神のいれたましゐにて、山海のおそろしき物の、
おとりまさりのあらそひはし給し也、殿原本たま
しゐにてはなきそ、さて大郎殿二郎殿、わらわを
ふさいにせんとし給ひしを、わらは凡夫に二世のち
きりを神になり得し、又ほんふのおもひおうても、
かみにはよもならし、ほんふのおもひきらぬやうに
とおもひ候て、おく山に入てかしの木をきりよせ
候て、わらわかたひにつくり、なんろたんのたま
しゐを入て、大郎殿二郎殿にはあはせて候しそ、
たとえにわらわにあふとそおもひ給ふつらん、さて
とのはら、まわうの物見んとて帰り給ひしに、
くろひめの鳥井の本にて、翁の若狭国からかけ」82
山にあるとの給ひしこそ、くろひめの権現よ、
それをもあなの底にて見しそかし、又からかけ
山のくちにてくみなわをこしにつけて、おのうち
かつきておはしましゝ翁こそ、山の山神こわうにて
おはしましゝか、又祢の国にてあはのしゝをおはせ
給ひしおきなこそ、わらはかちゝかたのおちこせん
よ、いとこ御せんあつまつてせんきに、三郎か祢の
くにゝおちたるらふまいには、何をかすへきとせん
き有とき、わらはかおふちこせん鹿嶋の大明
神のはからいに、いそき熊野権現に参らせ給ひて、
しゝを一疋申おろさせ給ひししゝそかし、殿の
いさせ給ひたりししゝはそれなり、さてなきの松
はらに、うしにしほゝつけゆきしあき人こそ、
かしまの大明神にておはしましかし、たゝのほん
ふならは、殿をはへひといゐて、しりたらはこそ道を
おしへめ、道をおしへ奉覧ために、商人にはへん
し給ふなり、観音たうにて、ほかには国は候はぬ
かと申給ひししんほつこそ、地蔵菩薩にておはし
ましゝか、きる物かへひに見ゆると、ぬきてすて
つれは人にて見ゆるとの給ひし僧こそ、観音
にてましましかし、さて祢の国にてあはのしゝを
おはせ給ひし翁の文たひしは、なとたひ給ひ候はぬ」83
かとあり、候とてとり出し参らせ給ふ、ひきひらき
て御覧して、
　こい（恋）しくはとふてもきませ大和なる
　三輪の山もと杉たてるかと
かゝれたるは、凡夫なりとも二世のちきりをこめ
よとや、それはおちこせんのをしへにあらすとも、
わらはかいのちにかわりておはしましたる人なれは、
わらわをふさいにせんとおほしめさは、大和の国すき
たてる門をたつねておはしませ、わらわか鏡
はなとたはぬかとの給へは、とりいたしてたてまつり
給ふ、此かゝみを天になけあけさせたれは、てんに
はるかにまいあかりて、はちりう一疋まいり、
彼はちりうにめして、一時か程に大和国
杉たてる門に入せ給ふ」84

絵　三郎、鬼の岩屋より救出した姫と再会、鏡を渡す」85
　姫は龍に乗って大和国三輪山へ帰る」86
　三輪神社の神人たち神楽を奏す」87　お社」88

烏数多群れ集まる」89　同上」90（絵終）

【字母　昌・】

その夜からす一二千、御とのゐ申てかくめきたり、
神人申けるは、この年月からすのはやしにとまらぬ
か、こよひはしめてとまりたるは、神の入給ひたる
あひた、御とのゐ申とおほゆる、いさやわれ〳〵も
御神楽参らせんとて、神人共まいりて、三日三夜の御
かくらを参らせけり、大宮司かむすめの七歳に
成けるに、大明神のられ給て御たくせん有ける、
いかになんちとも、御神楽まいらせたるこそ神妙なれ、
まことに身つからを身つからとおもはゝ、今夜あら
人の入給はんするなり、山に入てさいもくをとり、
七間にまいとのをつくりて、あらこも七まい天に」91
はり、七枚地にしきて、三日三夜の御神楽ま
いらする物ならは、しんたくあたえてまもらん
するなりと、御たくせんそあらたなる、神人かゝる
御たくせん承、やまに入て材木をとり、御託宣に
まかせまいとのをたて御神楽を参せけり、さて
三郎殿、嫡子の小大郎殿に、かうかのこほり三千
八百町の所を、一えんにゆつりたてまつり、
女房にいとま参せて、たかひに御名残をおしみ
給ひて、あら人神は大和国杉たてる門につかせ
給ふ、かうかの女房御なこりをおしみ給て、こちん
つゝかせ給て、大和国杉たてる門につかせ給ひて、
ひめみやの明神あら人神二人こもらせ給ひける
一ほくらに、三とろの神たちこもらせ給ては、なにと
かすませ給ふへき、此所をはかうかの女房にゆつり
奉りて、われはてんちくに行てすまむとて、
あら人神ひめみやの大明神うちつれて、天竺に
おもむき給ふに、てんちくの人あかめ参らする事
おろかなりけれは、あら人神おほせられけるは、此
国はひろしといへとも、人の心かいぬにて、すいしやく
をあかめ奉らぬなり、我朝日本国は小国」92
なれとも、人こゝろかしこくて、すいしやくをあか
めまいらするなり、おなしくは我朝をまもらむとて、
又日本国へかへらせ給ふ、天竺唐土のさかひに、
一りうしゆのたうけとてたうけあり、此一りう
しゆのたうけに、あら人明神ひめみやの明神
二所の神、おりさせ給ふてやすませ給ふ、此一りう
しゆのたうけのみなみのこしに、二所たち待
ます、此二所の御神のおほせに、あら人神日本
より天竺にわたりて過させ給はんとて、渡り
給ひたれとも、人あかめまいらせんとて、又日本え
おもむかせ給ふ也、いさや我らも御供申て日本へ
行てすきんとて、尤しかるへしと仰せ有けれは、
日本には、はままつひめと申候て、松はあるなれと、
から松はなかんなり、われらかゐて候はん所
のはやしに、うゑそたて候はんとて、くれ松から
松三本こして持給ひて、ゆんてめてにさけて、あら
人神とうちつれて日本へおもむき給ふ、一所
の御神は我朝につかせ給ふて、津の国住よし
の郡におちつき給て、住吉の大明神のほくらに
こもらせ給ふ、住よしの大明神の仰には、かくて
一のほくら四所の神のこもらせ給ては、なにとして」93
すくさせ給ふへき、此松をなけて、をちつかむ
ところに行てすみ給へとて、住吉の明神

くれまつ一本ゆんてに持せ給ひて、一ふり〳〵てなけ給へは、越後国くいて七かうかそのなか、まつのを六十六かう、そのうへの、せんちやうに落つき給ふ、みね七ツたに七ツにおちたてまつる時に二所の御神は松尾の山へわたらせ給ひて、此せんちやうにおちつかせ給て、むかしより今[93]にゐたるまて、其所の衆生を守護させ給ふ、松尾の権現是なり、浅間の権現は住吉に使者をたてられたり、大法師こほうしを以て、まにや候やらん、うけ給候へは、住吉の明神は、めつらしき松をもたせ給ひて候とうけ給り候、一本給はりて、身つからかゐて候山の、南の腰の」94

さひしく候に、うゑそたて見候はんと申給ふ、住よしの明神、候とてくれ松一本参せ給ふ、なきにうゑさせ給て、むかしよりいまに至まて、なきの松原とはこれなり、さてあら人のおほせには、佛も[94]神もわううつぬきたるところを、満ほらせ給ふなれは、われらか祢の国よりあなゐてしたりし所は、信濃国浅間のたけなきの松原こそゐてたりしか、おなしくは其ところの衆生をまほらむとて、なきにつき給ふ、なきにて王子三人まうけ給ふ、大郎の王子・二郎の王子・三郎の王子とておはします、かくてなきにしはしすみ給しか、あら人の神の仰せには、大郎の王子二郎の王子二人よひよせておほせけるは、此ところは水のたよりよき所なれとも、大道ちかき所[95]にて、むまのひつめかけさするはむけなる、やしきところをたづねてまいれ王子たちと

仰られけれは、承候とて、二人の王子たちはなきをうち出て、しなのゝ国をめくりて御覧するに、さくの郡しもの郷たなかのむらにつき給ふ、大郎の王子、二郎王子に仰られけるは、や、との二郎殿、所はよき所なり、父はたかき大神にておはしませは、いかに渡らせ給ふとも、人しん」95

かうしたてまつるへし、われらかやうなるせうしんを、誰かしんかうすへきに、ちゝに申とも、此所ほとの所をは給はらむすらん、たゝ此所にて[96]過給ひ候とおほせけれは、二郎の王子、尤とて大郎の王子二郎の王子そのまゝに、たなかのむらにそとまり給ふ、あら人神の仰せに、三郎の王子めしよせて仰せ有けるは、大郎の王子次郎の王子を、やしきところをたつねてまいれとてつかはしたれは、今まて見えぬそ、たつねてまいれとて仰せけれは、三郎の王子なきを打出て給て、信濃国をめくりて御覧すれは、さくの郡しものかう田中のむらへつき給へは、大郎の王子二郎の王子[97]の仰には、や、との三郎殿、ちゝは高き大神にて渡ら」96

せ給へは、とても人しんかうし参らせんすらむとて、此所よき所なり、ちゝに申ともくるしからしと思ふなり、此所にて過給へ、われ〳〵も諸共に過候はんするなりと仰せられけれは、三郎の王子申されけるは、これほとの所は父に申共給候はん、ちゝのふけふをかふむりては大事にて候へし、父の屋敷所を見おきてまいり候て申てこそ、又まいり候はめと仰せられて、たなかの」97

むらをたゝせ給ひて、すわのこほり上のみさや

980ま下のみさ山よき所と見たてゝ、父に参りて、
御屋敷所は見立て候よし申給へは、あら人神、
こわたり・はわたりさきとして、さきになきには
大法師・小法師・てなか・あしなかをとゝめおかせ給て、
あら人神は、かみのむらやま、もとやすのきの
もとにつかせ給ひて、御繁昌有、かたしけなく
御本地普賢菩薩、諏訪大明神是也、ひめの宮の
大明神は、下のみさやま、もとやすの木のもとに
たゝせ給ふて、御繁昌有、本地千手観音、下の
みさ山是也、三郎の王子は父にいとま申給ひて、
990さくのたなかのむらにおちつかせ給ふ、七日御まつり
に、三郎の王子の御まつりは、ちゝにゆるされあり
けれは、ゆゝしくまつらせ給ふ、大郎の王子次郎の
王子の御まつりは、ちゝのゆるされなかりけれは、
夜るひそかにこゑもたてすまつられ給ふ
なり、かうかの郡にてしかひし給ひし大郎殿二郎殿
は、其所の王子七社となり給ひて、その所の
衆生をまもらせ給ふ、あら人神はかみの御さ山
にて、御年七十三にて御往生とけ給て、大明」98
神とあらわれて、一切の衆生の願をみてさせ
1000給ふなり、大明神の仰には、七月三十日あらはた
いみて参らせよ、神徳あたへてまほらむとちかひ
給ふ、そのゆへは凡夫にてありしとき、ある
おんなのもとへかよひ給し時、女房のいふやう、
とのゝちゝも、わらわかもとへ入せ給ふ、かたりける
に、さてはちゝのかよわせ給ふには、おやにてこそ渡ら
せ給へとて、その父はかよひ給はす、それより
あらはたをはいみ給ふ、又大明神の仰に、ふく

【のちく】

むかはり月にかけていみて参らせよ、しからは
神徳あたへてまほらむ、其故はわれ凡夫にて
1010有し時、やまにしゝかりしたりしに、ある小家
によつて宿をかるほとに、あるし出て、是は
おやしゝて候か、三十五日にもなり候はねは、
かし参らせましとかたく申て、入たてまつら
さりしゆへに、ふくをはとかめ給ふなり、さんや
三十五日よりほかはいみ給はぬは、ならひの家
にやとをかり給ひしに、あるし申けるは、さん
をしていまた三十五日になり候はねとも、
日暮雨風是ほとにきひしく候へは、なにかく」99
るしく候へき、入せ給へと入たてまつりしに
1020よつて、さんを三十五日よりほかはいませ給はす、
さんの物、身つからか御はしらにとりつきてさん
をするとも、とかのおはします事あるましと
御ちかひ有、大明神の御前に有二のかまは、祢の
国にてしゝのかは二ツならし給て、うへをやすめ
給ひたりしかまのゆへなり、さていまに至るまて
よろこひおほしめすなり、さとみやと申すは、
きまれる月に入て、かうかの女房・かみの御さ山
の大明神・しものみさ山の大明神、三所の大明
神の世の中のせんきせさせ候はんとて、おはし
1030ますところをさとみやと申也、大明神の御前
にせんつのいき物の参る事は、祢の国にて
いさせ給ひたりししゝのおんしやうを、とふらわせ
給はむために、御ちかひによりてはしまりて、
よろつの生類をにえにかけさせて、縁を
むすひてすくはせ給ふなり、神は本地をあら

わし申せは、三ねつのくるしみをやすめおほ
しめすなり、あひかまへて〳〵大明神をしん
かうしたてまつる人は、同心に御本地を」100
たつね聞、人〳〵にかたりきかせて神徳をかふ
むるへきなり、おにゝ神のとらるゝとは、たとへは
きりんわうかひめみやの大明神をとり給て、
三年かあひた、岩屋のそこにおしこめられ
ておはしまし候事なり、世はしまりて
いまの世の人も申なり、又物をくり事に
ねんとひとならはしたる事も、観音たう
にて新発意のいくらともなく、おしかへし〳〵
祢の国の事をとひきわめ給ひたる事の
ゆへを申けるとかや

しなのなるすわの御池にめさなれや
さなきの浦によするしらなみ
信濃なるすはのみなとのかち渡り
こほりの上にこほりをそふむ」101

于時天文十二年癸卯十月八日
大隈国筒羽野村於新山寺
諏訪御由来之絵縁起書之
絵師迫田采女正酒井宗清
右筆者権少僧都聖誉
右此絵縁起本願主千代太輔同助七
又奉加之人衆
当所代官青山豊前守藤原照續
新蔵坊頼昏　石川常陸守同七郎左衛門尉
吉松民部少輔　諏訪祝次郎太輔
新山寺光金」102

平成二十一年二月
柳原由美
吉田千春　校